

娘の誕生がぼくを変えた！

パパになった男

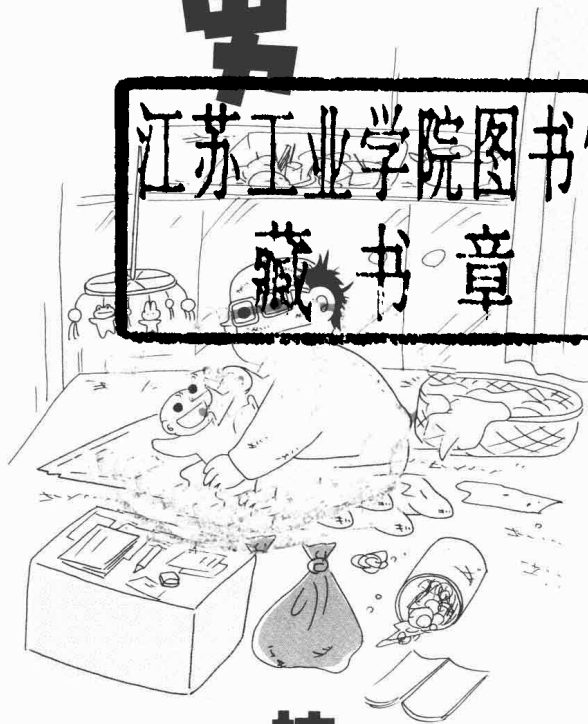
神足裕司



主婦の友社

な／パ
た／パに
田／

江苏工业学院图书馆
藏书章



神
足
裕
司

本書は、月刊「わたしの赤ちゃん」1995年5月号～97年4月号の連載に、新たに書き下ろしを加え、大幅加筆訂正したものです。

**娘の誕生がぼくを変えた/
パパになった男**

平成9年5月10日 第1刷発行

著 者…神足裕司

発行者…石川康彦

発行所…株式会社主婦の友社

〒101 東京都千代田区神田駿河台2-9

電話／(編集) 03-5280-7523

(営業) 03-5280-7520

印刷所…図書印刷株式会社

もし落丁、乱丁その他不良の品がありましたら、おとりかえいたします。お買い求めの書店か、本社へ直接お申してください。

©Yūji Koutari 1997 Printed in Japan

ISBN4-07-221617-8

図く日本複写権センター委託出版物

本書の全部または一部を無断で複写（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（☎03-3401-2382）にご連絡ください。

結婚は確かに人生の墓場だが、

子育ては生き地獄だ。と思っていたけど……。

パパになった男

目次

序として

パパになることの効用

5

第1章

子育てはライフ・レジャー

娘を好きになるまで。

15

13日の金曜日

16

笑う赤ちゃん

25

休日のパパ

32

パパの贖罪^{しよぐまい}

39

ゴックン モグモグ

46

子連れハワイ旅行

53

第2章

赤ちゃんの“魔性の魅力”

ぐんぐん人間になっていく娘。

61

苦勞は耐えることなく

62

遊びと人間

69

花嫁の父

76

直立二足歩行

83

ファーストバースデー

90

嫉妬は最高

97

英才教育について

104

第3章

人生の中心は家族である

正しく叩き直されるパパ。

111

子育て窓際族への危機

112

焚き火と人生

119

娘がキャバレー

126

うなだれのハワイ航路

133

自宅でのホームシック

140

魅惑の家族的ハワイ

147

第4章

山あり谷あり

娘は1才にして、女のすべてを持っている。

155

泣くゾのポーズ

156

絵本期

163

恐怖の「じぶんで」攻撃

170

わたしは2才

178

子育ては上達する

185

序として

パパになる ことの効用



ベッドルームでうんと気持ちのいいことをして、少し幸運に恵まれると、10カ月たってからすばらしい体験をすることができる。

パパになった自分に出会えるのだ。

パパになるという感覚は、もしこれを仕事にたとえるなら、これほどのことが自分にもなしとげられるものだろうかという驚天動地の大仕事である。もし遊びとしてとらえるなら、脂汗を流しながらとり組んだ麻雀その他ギャンブルいっさいと、野球でホームランをかつとばした快感と、サッカーでゴールを決めた快感を超えている。

ひとつしかない人生の意味が、赤ちゃんに出会って初めてわかる。

いや、それはいままでの多くの人生そのものがあまりに平凡でパツとしなかったから、赤ちゃんの誕生の経験が相対的に肥大化しているだけのこともかもしれない。

それにしたって、パパになることは、だれしも人生が変わるほどの体験だということは、まだ子どもをつくったことのない読者にだって、なんとなく理解してもらえと思う。刑事ドラマには、張り込み途中の主人公が産院へ駆けつけオギャーという泣き声を聞く劇的な場面が必ずあるじゃないですか。

もちろんそこまでの道のりはラクなものじゃない。

自分のおなかの中に、地球上のすべての命を抱え込んだかのように自信たっぷりのカミ

さんと、下僕としてのパパ志願者との間で、キビシイ主従関係が始まる。

荷物持ちも、洗い物も、ゴミ出しも、シーズンごとの衣装の出し入れも、みーんな未来のパパたるあなたにふりかかってくる。

ママ候補者はそのうち精神的に不安定になり、忙しいあなたが仕事のせいで夜遅く帰ってきたりすると、台所のテーブルに座って電気もつけずに涙を流し、ドキッとさせてくれる。なぜ泣いてるの？とたずねてみたって無駄だ。本人にさえその理由はわからない。

さらには、クソ忙しい仕事のさなか病院へ引っ張られ、血みどろの出産ビデオを見せられてもショックで気絶しないかどうかチェックされる。分娩に立ち会うための準備だ。

いよいよ予定日が近づいて、安全のためカミさんが里帰りしてくれたりすると、あなたは心の底からホッとする。

だが、平穏な独身生活は長くつづかない。知らせを受けて病院へ駆けつけたときから、またもや、この10カ月間の仕打ちに倍する強制労働と奉仕の日々が始まる。

けれども、不思議なことにそれらはちつとも苦になるものではない。そのときあなたはもうすでに、パパという別な生き物に変身しているからだ。

学生時代、アパートの流し場に汚れたラーメン丼を積み上げていた自分が、進んで哺乳びんを煮沸器へ入れ、汚い指で触れないよう鉗子で慎重にとり出している姿に自分で驚く。

冬場なら、部屋が乾燥するのではないかと心配になって、通販雑誌にのっているオイルヒーターの広告を眺める。それまで自分はクルマかゴルフ用具のカatalog以外へ、これほど熱心なまなごしを向けたことがあったろうか？

ぼくは親切な編集者氏の助言に従って『わたしの赤ちゃん』という雑誌で自分の変身ぶりを書き留める機会を与えられた。

親切な、というのは、その氏がおっしゃったように、どんなときでもガンガン電話をしてくる締め切り厳守の編集者の助けなしには、自分の赤ちゃんについてさえメモの一行も書き残せなかったろうから。

いまになってみると、氏に感謝せざるをえない。ぼくは娘の誕生によって変わっていく自分の姿を書き留めることができた。

ぼく自身は広島という、新しいタバコがテスト販売されるような全国平均的な地方都市で生まれた。浪人を一度経験して、東京の大学へ進学してからは、地方出身の若者ならだれでも考えるような理想の人生プランを立てた。

ビッグになってやる、とかね。まあまあ。

ビッグになるぞ、と大風呂敷を広げながら、実際やったことといえば、調子良く、東京のお嬢さんを射止めて逆玉（の輿）に乗ることくらい。90年代的に言えば、お嬢さんをゲ

ットするということになる。

その先なんてまるで考えていなかった。

いまの女子高校生が、卒業してオバンになったら人生終わりと信じ込んでいるようなもの。その程度のことだ。

結婚生活なんてはじめに考えたことなんかいわけで、いざそれが始まってみると、外食とカミさんが作ってくれた食事と、夕食を2回も食べる生活で、1年間で10キロも体重が増えてしまったくらい。

旧ソ連のチェルノブイリ原発事故は、われわれ夫婦の結婚生活にもクライ影響を与えていた。南極のオゾン層が破壊され、地球人口は爆発し、ハルマゲドンさえ現実のものになりそうな暗い未来へ自分たちの子どもを送り出すべきではないような気分があった。

いっぽう都会的な夫婦のあり方として、DINKS、つまりダブル・インカム・ノー・キッズという子どもなし共働きの優雅な家庭生活が理想とされるような背景もあった。

わが家といえどもまるつきり鈍感ではないから、家族計画はした。いまではたいていのカップルが、いつ子どもをつくるかについて綿密な計画を立てていることと思う。子育てが始まって仕事でのキャリアが積みなくなったり、夫婦そろっての長期海外旅行ができなくなる前に、ゲップが出るほど遊んでおこう、とね。

赤ちゃんはコウノトリが運んでくる偶然の授かりものではなく、そのタイミングを自由に選択できるアトラクションのひとつなのだ。

だが、その考え方にぼくは多少批判的なところがある。赤ちゃんをつくるのに最適な親の年齢っていったいいくつだ？

若すぎる夫婦では家計が苦しいし、年をとって生活が安定した夫婦なら、教育費をつぎ込み放題で甘やかした結果、麻薬に手を出すようなバカ息子を育ててしまう。

だれにとってもそれは人生一度きりのことで、16色のパレットから好きな色を選ぶようなわけにはいかないのだ。

とはいえ、小心な神足家がおおざっぱに立てていた理想の人生設計は、ぼくがしでかしたずぼらな一夜のおかげでもろくも崩れ去った。「だいじょうぶだから」。崩れ去って良かった。その件に関して詳細な表現をするとスリッパが飛んでくるので、ここには書けない。しかし、スリッパが飛んでくる危険も顧みずここに記しておかなければならないのは（カミさんにはここで目をつむってほしいが）、二人目の子どもを得るにあたってぼくたちが、特にこのぼくは、血のにじむ、いや、ゲッソリするような努力を積んだという事実だ。

ぼくはそのころ週刊誌で、一週間に一度レストランを食べ歩くという、ハタから見ればまことにけっこうな仕事をしていた。

あれは1993年の暮れということになる。

この本の表紙イラストを描いてくれたサイバラが、取材のあと意地悪そーな猫なで声でわざわざ聞いてきたものだ。「どうして家へ帰りたくないの？」

二人目の子どもをつくると決意したその日から、カミさんはそのテの本を買い込んだ。基礎体温を測り、その日の前後2週間、ぼくは凄惨な努力に励んでいる真っ最中だった。

今考えてみれば、それはまったく非科学的な誤解に基づく努力の無駄づかいだったのだが（アレがあんなにつらいと思った4カ月は人生で初めてのことだった）、結果は上々。

カミさんの決意のきっかけといえ、当時小学校へ上がった上の子が漏らした一言。「ひとりっ子だからよくダメなのかなあ」だ。

上の子、祐太郎が生まれたのは、カミさんがもうすぐ28才、ぼくがまもなく30才になる1987年の夏だった。

7月28日の深夜に破水したカミさんを、しかし陣痛がともなわず、生まれるのかどうか半信半疑で都心にある病院までぼくは運んだ。28才にもなっていたぼくが、いやいや運転免許をとらされたのは、まさにこの日のためだった。

「まだまだですよ」と言う看護婦さんの言葉に安心し、締め切りが迫っていたこともあって、カミさんを病院へまかせたぼくは、当時働いていた小さな会社へもどってそわそわし

ながら原稿を書いていた。

だが、電話は鳴った。予定日とされた日より12日間も早く。

赤ちゃんに、あらゆる予測は通用しない。ぼくたちの場合、長男は予定日より早く、長女は予定日から13日遅れて生まれた。予定日はあくまで予定日だし、分娩室へ入ってから生まれるまでの時間も二人の子どもでもまったく違った。

赤ちゃんに対するぼくの気持ちの持ち方さえまったく異なる。

ぼくにとって、男の赤ちゃんが育っていく様は自分の人生を再現してくれる大河ドラマであり、女の赤ちゃんが見せてくれるのは、隠されていた人生の謎を解き明かしてくれるサスペンス映画だった。

息子はすでに9年分もの長いフィルムを見せてくれている、が、この短いスペースで何を語れるだろう。

結論から言えば、息子の誕生によってぼくはあの甘酸っぱい少年時代をもう一度繰り返し、男としては家族の収入源として、子どもの手本としての責任感に目覚め、世の若者たちが軽蔑をこめて呼ぶ、おやじという生き物になった。パパから、さらにおやじである。

だが、だらしのない、人目を気にしないおやじになったとしても、パパという時間帯を恥じることなく精いっぱい生きたぼくは、神経が磨滅して、いや、大いなる満足感によって

程よく鈍感になり、いまでは老いを少しも痛みを感じない。

パパになる前は、若さを失うことがひどい恐怖だったのに、いまは平気なのだ。

パパになることにはそんな意外な効用がある。ではそれが、いったいどんなふうに始まって男性のなかで進展していくのか。読者のみなさんには無痛のまま愉しんでいただければ幸いである。

いや、もしこの本が、ただひとりよがりの親バカ日記に終わっていたとしても、版元の主婦の友社と苦勞してくれた担当者には申しわけないが、ぼくは十分に幸せだった。書いているだけで、ひとり深夜に不気味なくすすす笑いを何度もしてしまうようなこんな話は、ぼくにとって一生涯、そうありそうもない。

だれにとつても、パパという日々は満ち足りた日々である、とぼくは思う。したがって、それを思い出し綴ることもまた満ち足りていた。すいませんけど。

